

石上神宮の一考察

石上神宮は、大和盆地の東部、標高 266m の布留山の北西麓に鎮座しています。

御祭神は、布都御魂大神、布留御魂大神、布都斯御魂大神、外四柱です。

布都御魂大神は、神武天皇の国土平定の途上、御祭神が熊野に天降られて邪神を平らげられ、建国の偉業に協力されましたが、その時の平国剣（くにむけのつるぎ）です。さらに遡ると、この剣は饒速日命（にぎはやひのみこと）が天降られた時、天神より授けられた剣であり、さらに遡ると、素戔嗚尊が出雲国で八岐大蛇を退治された時に用いられた剣、すなわち「天羽々斬剣」ということになります。

物部氏にまつわる業績がまとめられた『先代旧事本紀』によると、石上神宮御創建の由来は、神武天皇によって物部氏の遠祖、宇摩志麻治命に命じられ、建国にあたって邪神を破ることで貢献した詔霊（ふつのみたま）を宮中に献上させられますが、それを崇神天皇の御代に、同じ物部氏の遠祖、伊香色雄命が天皇の命により現在の石上の布留の高庭に遷されたことと記されています。この伝承から、石上という地が古来、聖地として認識されていたことが知られます。そして、武神としての神格と物部氏に伝わる鎮魂の呪術とが一体となって、神秘的な霊能をあらわす神として信仰されることとなり、さらに広く畏敬の念を持たれるようになったものと思います。

神域は、深い緑につつまれて静寂としていて、古代のままに残されているように感じられます。また、老杉の梢を鳴らす風の音も、すがすがしく感じられますが、この石上神宮は、明治まで本殿がありませんでした。神奈備山の一霊区、現在の本殿の建てられているところを禁足地と仰ぐ信仰でした。その地は古来「高庭」と称され、瑞垣で囲い、石窟を造り、御神体と御神宝を埋祭し、その上に「布留の神杉」と称される杉が植えられ、江戸末期にまでいたりしました。ところが、明治になってその地を発掘して学術調査することとなって、発掘の結果、御神体の剣が出土されたため、埋めもどすのではなく、本殿に奉安してお祀りする祭祀へと変更されて今に至っています。

ところで『万葉集』に「石上 布留の神杉 神さびし 恋をも吾は 更にするかも」という柿本人麻呂の歌がありますが、この歌に関連して「布留の神杉」にまつわる次のような伝承が、石上神宮公式ホームページに記載しています。

「昔、いその神の振る川（今の布留川）は、山深く、樹木が生い茂り、流れも美しい川でした。当時の人々の暮らしに欠かすことのできない貴重な川だったので。ある日、一人の女が白い布を洗っていると、上流から草木をなぎ倒しながら、泳ぐように流れを下ってくる細長いものが目につきました。みるみるうちに白布にすっぽりと包まれたそれは、よく見れば剣先鋭く、まばゆいばかりに光を放っている鉾でした。驚いた女は、自分の家に持ち帰るのをおそれ、川のほとりに立てて日ごとお祭りを欠かさずに行いました。そのおかげで、人々は日々平和な生活ができたといえます。その後、鉾も雨風にさらされて朽ち果ててしまったので、その地に穴を掘り、鉾先を埋めて祭りました。すると、間もなくその地に杉が芽生え、天をもさすほどにすくすくと成長しました。そして、この杉が布留の神杉と言われるようになったということです」（以上、石上神宮ホームページより）

神の依代である「布留の神杉」が、なぜ「恋の歌」となるのかですが、それについて考えてみますと、『万葉集』において「石上」や「布留」を詠んだ歌が二十数首あって、それらすべてが「恋の歌」です。古来、当宮が神霊を身体に振り付けて魂を鎮める鎮魂祭が行われる御宮であること、鎮魂と書いてタマフリと読まれるように恋の相手の魂が、このお宮の神徳によって揺り動かされ、秘めたる自分の恋が、このお宮の神徳によって叶えられるようにという思いで詠まれた歌です。そのような思いを心にいだきつつ、このお宮に参拝し、神域で霊気につつまれつつ、自分の恋が相手に伝わってほしいと願ったことから「恋の歌」とされたのだと思います。

（編者記…当日の出席者より皇学館大学三年、西北会員に書いてもらいました）